

かでシンポジウム自体は時間通りに、また整然と運営感謝したい。今回のシンポジウムで Ajayaghosh, Samanta, Chowdhury といった旧知の方々とふくめて、多くのインドの研究者と話ができたことはよい経験であったし、またインドの研究のレベルの高さには驚かされた。このような土壌のもとに開催され

第7回 Trombay Symposium on Radiation and Photochemistry

Report on VII th Biennial Trombay Symposium on Radiation & Photochemistry (TSRP2004)

熊崎茂一 (京都大学大学院理学研究科化学教室)

本会議は2004年1月7日から12日にわたり、ムンバイ(ボンベイ)のバーバー原子力研究所において開催された。開催規模は、口頭講演47件(うちインド国外から30件、光化学32件、放射線化学15件)、ポスター発表152件(光化学分野99件、放射線化学53件)であった。単一会場で全ての口頭講演が行われ(海外招待講演は30分)、3, 4件ごとに休憩が30分程度入るといった比較的ゆっくりとした開催体裁であった。学会は本当の意味での国際会議というよりはインド国内学会に外国からの招待講演者を多数招くという形式であったと思う。筆者は初めてのインド旅行で、かつ専門外のことにも不案内であるのである、その点を念頭に以下の記事を読んでもらえれば幸いである。

開催趣旨としては、光化学と放射線化学の融合を目指しているらしいが、異分野交流の実践は本会議に限らずなかなか難しいようである。両分野に共通し、かつ基礎的な問題として溶媒和電子生成、安定化機構の問題がある。大阪大学の古澤氏はサブピコ秒の時間幅を持つ電子パルスで生成されたメタノール中の溶媒和電子の初期安定化過程を報告した。時間分解能においてはレーザーパルスによる研究の方が進んでいるが、生成方法の違いによる差には未だ未解決部分もあるようだ。一方、本会議に出席した理化学研究所の田原氏らは時間分解レーザーラマン分光で水中の溶媒和電子の研究を進めているが、本会議では別の話題についての講演であった。主催者側の配慮によっては、両手法による研究の進展具合を多くの聴衆が比較、理解するいい機会になったはずである。同じ国内に居ながら必ずしも交流が十分でない研究者同士が海外で初めて直接議論をすることができるというのはよく聴く話である。私自身、放射線化学という名前の研究室に13年前には居た

された。Das 先生を中心とした関係者の努力には深く次回、3年後のシンポジウムには大きな期待が持てる。私としては、また参加したいと思うと同時に、いままで参加していない方が3年後に参加されることを強く期待する。

のであるが、イオンビームや電子ビームを用いる研究者と会話する機会は極稀である。講演時間中ではなく、食事時間中に「イオンビームは物質と相互作用をする際に、ある一定の深さで急激にエネルギーを失って停止し、その近傍の物質とのみ強く相互作用する性質がある。このイオンビームの停止位置を人体の腫瘍の位置に合わせて照射すると、がん細胞のみにダメージを与えることが出来る(日本原子力研究所ホームページより)」という異分野の常識を初めて明確に認識できた。このがん医療方法は急速な勢いで普及が図られようとしているらしい。また、筆者にはバーバー原子力研究所の H.S. Misra による次のようなポスター発表も新鮮に感じた。*Deinococcus radiodurans* という放射線照射耐性細菌がいるらしく(サイエンス誌には全ゲノム地図も発表されている)、それは pyrroloquinoline-quinone (PQQ) 合成酵素を持っている。PQQ が酸素活性種を不活性化するらしいことが、PQQ 合成酵素を発現させた大腸菌の示す高い放射線耐性によって検証された。

余談であるが、当研究所の研究事情を聞いたところ、国全体の国防、エネルギー政策の影響を受けて、光化学よりは放射線化学のほうが大きな予算がついていると言うことで、どこかの国と同様と合点した。また、筆者は、香辛料の効いた食事の摂り過ぎか、会議日程の後半で、消化不良を起こしたが、症状はそれだけで、周到に持参した日本食でなんとか過ごすことができた。回数を重ねれば、インド旅行はもっと楽しめるはずだとの印象を持った。地球が物理的に小さく見える現代でも、まだまだ社会的には多様性に富んでいる実情を強く意識させられる会議と旅行であった。日頃の不満をしばし忘れ、地球上の全ての人々の平和を願って帰国の途に着いた。

第26回光化学若手の会

共催：光化学協会、日本化学会
会期：平成16年6月25日(金)17時から6月27日(日)正午まで
会場：神戸セミナーハウス(有馬温泉周辺)〒651-1503 神戸市北区道場町生野字ロクゴ 318-2
TEL : 078-985-4391 FAX : 078-985-7219
<http://www.kcva.or.jp/seminar/>

主題：光化学に関する基礎からの講演、討論、意見交換、交流を目的とする。

特別講演：入江正浩 九州大学大学院工学研究院応用化学部門・教授「光化学と材料化学」坂田祥光 大阪大学・名誉教授、「人工光合成に向けた研究の歩み」

発表：話題提供講演(発表15分、質疑応答10分)を募集。また、参加者全員のポスター発表(学会で発表済のもの、自己紹介、研究室アピールなどを企画しています。発表者および講演タイトルを明記の上、参加申込と一緒にお願いします。口頭およびポスター発表に関して、一件につきA4用紙半分の要旨をお

願います。ご自由にお書き頂き、pdf書類をE-mailにて5月28日までに事務局までお送りください。

参加費：一般25000円、学生18000円(3日間の食事・宿泊・会場費・懇親会費および配付資料代込み。参加登録後、郵便振込用紙をお送り致します。日程途中からの参加ご希望の方は事務局までご連絡ください。)

申込要領：E-mailに参加者必要事項(氏名・性別・所属・職または学年)を明記の上、wakate@molpro.mls.eng.osaka-u.ac.jpまでお送りください。

申込締切：5月28日(金)

事務局：〒565-0871 大阪府吹田市山田丘201大阪大学大学院工学研究科 物質・生命工学専攻、北村隆之、長谷川靖哉 TEL:06-6879-7926 FAX:06-6879-7875。光化学若手の会のホームページ <http://www.molpro.mls.eng.osaka-u.ac.jp/wakate/>

第17回配位化合物の光化学討論会

共催：光化学協会、日本化学会九州支部

日時：8月7日(土) - 9日(月)。7日14時開会、9日昼食後13時閉会

場所：湯布院ハイツ(大分)〒879-5102 大分県大分郡湯布院町大字川上 1946-25
<http://www.kinrou.or.jp/yuhuin-heights/>

発表形式：口頭発表 発表20分、質疑5分を予定(発表の最初5分は学部4年生にも理解できるレベルのイントロダクションをお話し下さい)。ポスター発表。

特別講演：大阪大学理学研究科 大野 健氏、理化学研究所 星野 幹雄氏

今まで配位光化学討論会を育てて下さった先生方の実験手法や、理論の継続性と将来の発展の動向をうかがう予定です。

発表申込締切：5月31日(月) 申し込まれた方には6月末日にプログラム、予稿原稿書式、参加登録方法等詳細の資料を発送いたします。

発表申し込み要綱：1. 所属、身分、名前。2. 講演題目。3. 発表形式(口頭発表あるいはポスター発表の別)。4. 参加登録を別途お願いします。

予稿原稿締切：7月5日(月)

参加登録申込締切：6月5日(月) 参加登録申し込み要綱：1. 所属、身分、お名前。2. 宿泊日に○をつける()8月7日、()8月8日。2人部屋をご希望の場合はお一人一泊につき3150円高くなります。また、同伴者名をご記入ください。希望に添えない場合もあります。

参加登録費：(宿泊、食事、懇親会、要旨集代を含む)一般34,000円(学生29,000円)原則事前登録の

第26回光化学若手の会 in 神戸

大阪大学大学院工学研究科 北村隆之・長谷川靖哉

第26回光化学若手の会が6月25日(金)ー27日(日)、神戸市立神戸セミナーハウスで開催された。全国24研究室からなる73名の参加者が集い、光化学に関する情報交換や交流が行われた。

特別講演には大阪大学名誉教授の坂田祥光先生、九州大学の入江先生をお招きし、それぞれ研究スタイルなどについてご講演を頂いた。また、若手研究者による話題提供講演7件、今回の新しい試みである「光化学ディスカッション」2件も行われた。

<特別講演>

坂田祥光先生「人工光合成に向けた研究の歩み」

入江正浩先生「光化学と材料化学」

<話題提供講演>

大阪市工研・渡瀬星児先生「配位子設計による金(I)チオレート錯体の発光特性の改善」

金沢大学・甲谷繁先生「可視光応答性 BiVO₄ 光触媒による多環芳香族炭化水素の分解」

電気通信大学・平野誉先生「生物発光に学ぶセンサー分子開発」

大阪府立大学・前多肇先生「ケイ素官能基を有するスチルベノファンの合成とその性質」

信州大学・宇佐美久尚先生「有機-無機複合L

B膜の光電子移動挙動」

大阪市立大学・ハッ橋知幸先生「超高強度・超短パルスレーザーによる有機分子のイオン化」

<光化学ディスカッション>

群馬大学・山路稔先生「高い三重項収率を有するナフタレン誘導体の光物理・光化学」

大阪大学・北村隆之先生「太陽電池は本当に環境にやさしいかを考えてみる」

若手研究者および学生によるポスター発表は62件となり、2日にかけて活発な議論が行われた。このポスター発表の中から、優秀賞5名と最優秀賞2名(九州大学・森本正和君、大阪大学・中村一希君)が選ばれ、最終日に表彰された。

今回の光化学若手の会の新しい試みとして、1) 質問時間をたくさんとる、2) 参加者全員のポスター発表と講演要旨作成、3) 光化学ディスカッションによる自由議論、を試験的に行った。これらの新しい企画が活発な議論の場となり、連日夜遅くまで研究等について語り合いが続いた。若手研究者や学生の交流も深まり、密度の高い光化学若手の会をおこなうことができた。なお、来年は電気通信大学・平野誉先生の研究グ

ループにお世話いただくこととなった。

最後に、本会を開催するにあたりご協力、ご支援いただきました光化学協会、日本化学会に心から感謝いたします。また、会の

運営や進行に関して多大なご尽力をいただきました大阪大学大学院工学研究科・分子プロセス工学専攻の皆様にも暑くお礼を申し上げます。



全体写真 (2004年6月27日、神戸セミナーハウスにて)